

正宗白鳥「今年の秋」論

はじめに

「今年の秋」(中央公論 昭34・1)は、傘寿を迎えたにもかかわらず、依然として衰えることを知らない老熟した創作ぶりを喧伝することになった白鳥晩期の代表的短編小説である。周知のように、表題作を書名にした作品集『今年の秋』(昭34・5 中央公論社)は、昭和三十五年一月讀賣文学賞小説賞を受賞することになった。単行本になった時、江藤淳『今年の秋』(週刊読書人 昭34・6・22)等の総説的な批評があるが、意外なことに「今年の秋」を単独に論じた本格的な言及は乏しい。その後、「今年の秋」への関心は、兵藤正之助・山本健吉・武田友寿・高橋英夫等の諸氏によって、白鳥最晩年のキリスト教の問題に絡めて論じられ、異なる視点では、松本鶴雄氏が家督相続問題を強く意識した考察を行っている^(註1)。しかし、私見によれば、いずれの論も、白鳥最晩年の到達した思念を解明せんとするあまり、いきおい論法が作者白鳥

瓜 生 清

(国際共生教育講座)

(平成十四年九月五日受理)

の内面と作品を癒着的に処理する傾向を強くしている。結果として、表現の固有性がおざりにされ、論拠としての読みが不徹底になっている。きらいを払拭しきれていないように思われるのである。しかも、厄介なことは、キリスト教への回心に関連づける論は、白鳥の絶筆「白鳥百話」(文芸 昭37・4・10)の編集担当者であった田邊園子氏の「作家の死 正宗白鳥とつね夫人」(『女の夢 男の夢』(一九九二・一〇 作品社)所収)の衝撃的な証言によって、論理構築の前提自体を問い直さなければならぬ状況にある。本稿では、作者についての目配りは、作品について有効な理解をもたらす場合に限定することにし、作品の表現に即して読み深めることを目差していきたい。

(一)

単行本『今年の秋』の末尾には、「今年の秋」を論じるに際して無視

し難く、かつ有用な「跋」文が記されている。そこには、二つの重要な問題点が含まれているように思う。以下、第一点目の事柄に關係する一節を引用する。「私は、この頃は、小説とか隨筆とか評論とかの區別を考慮しないで書くやうな氣持になつてゐる。その時々^々の見聞や感想を、文飾を施さずに、心に浮かぶまゝに記してゐるのである。」白鳥後半生の散文が放つ魅力の一端は、裝飾過多の作為と縁遠いところに成立した融通無碍な感想録的文体にあると言えるのであるが、このような小説と他のジャンルの接近、小説から見るとその隨筆化と言える傾向は、後藤^{注2}亮氏が、小説「人さま」(「中央公論」大10・9)を、プロットの進行に合せて、自在に感懷を織り交せていく新文体を確立した作品と位置付けており、なにも戦後に目立つた現象という訳にはいかないのである。従来、新潮社版・福武書店版の『正宗白鳥全集』の編集では、いずれも「今年の秋」を小説として取り扱っている。わたくしは、あとに述べるような理由から、このように分類することに合理的な根拠があり、妥当な判断であると考えている。しかし、全ての人が一樣に小説と解しているわけではない。管見の範囲であるが、近年の見解を一二例示するならば、白鳥研究家として知られる兵藤正之助氏は、三好行雄・他篇『日本現代文学大事典 作品篇』(平6・6 明治書院の「今年の秋」の作品解説で、白鳥最晩年の回心への契機を示した「隨筆」であると明確に断定しているし、谷沢永一監修・青山毅篇『昭和文学年表』第四卷(平7・11 明治書院)は、「今年の秋」を「評論・隨筆」欄に記載している。分類上の抜き差しならない根本的対立というほどではないが、この一種の混乱現象は、上記「跋」文の趣旨が關係してくるので、明確にしておく必要があろう。

生母美禰が亡くなったのは、昭和十七年四月二十五日である。^{注3}「今年

の秋」において、母を葬った時の先祖伝来の墓地が「みづ／＼しい新緑」に彩られていたと書かれているのは、母の他界が初夏にさしかかる時候であつたからである。作品集『今年の秋』は、父・母の死の前後を描いた一連のレクイエム小説「今年の春」(「早稲田文学」昭9・6)「今年の初夏」(「八雲」昭18・6)を発表された順に収録しているが、「今年の秋」は、雑誌「中央公論」の初出、中央公論社刊の初版のいずれの本文も、生母の臨終記である作品の題名が「今年の初夏」ではなく、「今年の夏」と書かれている(傍点稿者、以下同様)。よもや八十歳の高齡に達した白鳥が、単純なミスを連発したのではあるまい。小説「今年の秋」において、主人公の「私」は、次弟Aとの今生の別れを済ませて故郷を出立する直前に、父母を鎮魂した連作小説に接続して、弟Aの「死」を「今年の秋」、さらに「私」自身の遠くない「死」を「今年の冬」として構想する。実母の終焉を描いた作品名を「夏」とする処置によつて、一連のレクイエム小説の時間は、より整序され、それぞれの「死」を各季ごとの故郷の自然の風光をまじえて追想する整然とした構図を完成している。このような意図的な処置は、「その時々^々の見聞や感想を、文飾を施さずに、心に浮かぶまゝに記してゐる」と述べた「跋」文の趣旨と矛盾する。要するに、単行本『今年の秋』を纏めた白鳥に、文芸上のジャンル意識に囚われない、やや無手勝流の創作觀があつたとしても、それが即「今年の秋」の理解に適用されて差し支えないということにはならない。言わずもがなのことであるが、創作である「今年の秋」の表現世界について解釈の筋道を立てることの方が肝要である。

第二点目は、「跋」文中にある「重つたるい筆を動かして書いたものに、却つて自分の本性が出たり、心魂に潜んでゐるものが煮染み出ることもありさうである。」という注目すべき表現についてである。重篤な

病状に陥った弟を見舞うために、急ぎ西下した白鳥は、郷里から昭和三十三年十一月三日付の妻つ祢に宛てた書簡で、親族・見舞い客が詰め掛け「寝る部屋もない有様」等の「コンラン」を伝えた後、「人の事より自分の身について所置せねばならぬ。こちらの不動産についても何とか始末せねばならぬ。」と動揺を隠せない切迫した思いを述べている。老境の白鳥は、迫り来る〈死〉の問題の対処に切実感を募らせなければならなかったのである。要するに「今年の秋」は、〈死〉の問題を契機にして、老作家が「心魂に潜んでゐるもの」へ問いかけ、その解答を自己決定せんとした創作であつたと思われる。

(一)

作品内容の展開について整理するならば、すでに古田義範^(注4)氏が「『今年の秋』一篇の構成は、およそ起承転結風な四段落に組み立てられよう。」と指摘しているように、四部構成の小説と理解してよい。ただし、四部構成説については、細部に異論がある。第一部の終わりは、長男の特権を行使し東京遊学を許された「私」が、帰郷の車中で終始割を食つた故郷残留者Aへの心理的負債を追想するために、眠りづらい一夜を送る件で分割するべきである。最終部は、弟Iの通知によつて、Aの葬儀の一部始終を知ることになった箇所から始まると考えるべきであろう。なお、主題論的に理解を明確にしようとするならば、もつと大胆な構造把握が求められよう。このことは後述する。

さて、「今年の秋」は、以下のような平明な書き出しから始まる。

十月は好季節であるが、毎年雨が多い。旅行しても、家にゐても、日を暮し心地のいゝのは十一月頃からである。今年の秋、私はいか

にして過さうか。

深まる清澄な秋の到来を心伸びやかに実感する無造作な書き出しである。このような放恣な感慨が成立する背景には、「私」の中に、平穩に流れていく時間について疑う必要に迫られていない自足した無事な日常があつたことにならう。〈今年の秋〉の愉樂を存分に享受せんとする能動的な意思是、「芸術祭」への列席、放送局の録音などの叙述が示しているように、「私」が、老年を思わせない豊饒とした現役振りであることによつて保証されていた。「私」が放送局での仕事を済ませ寛いでいた時、郷里の弟Aが危篤であるという連絡に不意打ちされる。「今年の秋」は、平穩な老境を悠悠自適に楽しむ「私」の自足した日常に、突如其来に目が入れられることによつて、大きく反転していく。小説はその冒頭から、弟Aをめぐつて、次々と新たな事態への認識に連れ出されるアイロニカルな小説の方法を打ち出していたのである。それは、すぐさま、弟の「築土のI」と打ち合わせた結果、夜行寝台で帰郷を急ぐことに決し、「忙しい思ひ」をしている間中、しばしばAの顔を思い浮かべる件で、発現することになる。弟Aへの感情は、さらに増幅され、「私」の側を行き交う他人が雑然たるシルエツトのように思いなされるのに対して、遠く郷里で死に瀕しているAの姿が、「厳然たる人間存在」として意識されていくのである。注意を喚起するまでもないと思うが、これら一連の感情の流れを、「私」自身やや訝しげに思っているのではないか。なぜなら、じつは危篤の連絡に接した時の当初の反応が、異例な淡白な感じに読み取れるのには理由があるのであつて、「他人が他人である如く、兄弟も他人とさしたる相違がないやうに思はれてゐた」「私」は、肉親と「影」のように淡い他者との間に、さほど親疎の差はないと独り決めにしていたからである。そこで、「私」は弟Aとの間柄を丁寧に辿

り直す必要に迫られたのである。

「一家の長男」である「私」と「次男」であるAとは二歳違いで、「小学校卒業時分まで、寝食を共にしてゐた」関係にあつた。家常茶飯を共有したAは、たしかに「肉体も精神行動」も最も熟知した濃密な関係を結んだ存在であつたといえるだろう。しかし、Aに対するにわかな感情の傾斜は、生活を共にした時間の多寡によつて説明できるほど単純な問題ではない。後述の表現にあるように、「私」にとつての小学校卒業前後は、原初的な内面の不安に動かされ、進んでキリスト教に接触し始めた自己形成史の起点を決定づけた時間であり、Aと内面の揺籃期を身近に生きながら、お互いに異なる人生を辿る別れの時期でもあつたのである。多感な少年時代の記憶を蘇らせることにより、人間相の断片ではなく、「純粹の人間をそのまゝに見たのは、Aに依つてあるやうに感ぜられた。」のである。熟知した血縁のAは、「私」に死生の問題が棚上げのままである無様さを突きつける別様の「人間存在」として、鮮明に意識し直されていくことになる。こうして何事もない好時節は、一転して重い意味を問ひかける〈今年の秋〉に転調を開始する。

旅支度のため急ぎ帰宅した「私」は、平素、「私達」夫婦が「葬式の始末」を取り仕切ってくれる「調宝な人」を身近に欠いていることに強い懸念と不安を感じてゐることを強調する。ここから老境を存分に楽しむかのような印象は一変し、「私」の恒常的な難問が、迫り来る〈死〉への現実的な対処に焦慮を深める老残の様相であることが暴露される。「子供のいない私」は、芸術上の功績が顕著である「芸術院会員」で、「勲章」を貰つてゐる社会的榮譽者（当然文化勲章の受賞者を意味しよう）であるために、死後の告別式において「規定」に従つて行われるおおよけの弔問に「儀礼を果す人間」がいないことに、「取越し苦勞」を重ね

ているのである。「私」の老人特有の心配症には、特殊な事情があると言えなくもないのであるが、虚礼への過剰な気配りに焦燥感を深める「私」の造型は、社会的榮譽に縛られた人間の凡俗な悲鳴そのものである。しかし、「私」の本質を凡庸な常識家と片付けることは、一面的であるという謗りを免れまい。そこには、儀礼に骨がらみになった形式主義者ではない別の面貌を見定めておくことが必要であらう。「虚礼にしても礼を守らねばならぬ」と表向きの理由を強調する律儀な常識人を装つているが、「私」の精神の本領は、「古い朽ちた見すばらしい一塊の生物として死んで行くのが、自分の身にふさはしい」と考えるようなシニクな開き直つた死生観の持ち主であり、一切の現世的な榮達に信を置いていないシニシズムであらう。

眠りづらい車中の回想場面は、弟Aへの悔恨に似た「負い目」意識を目覚めさせた過去のエピソードを鮮やかに再生させる。駅に預けられたままの「私」の「行李」を、三里の道を往復して取りに行かされたのはAであつた。その時、喉の渇きを癒すために「ラムネ」を飲んだと言つたAの言葉は、「私」に刺さつたまま生き残つていた苦い記憶であらう。帰省中、病気に苦しんだ「私」が果物を欲しがつたため、Aが二里の近隣の村まで「梨」を求めに行かされた思い出も、同断である。「早くから故郷を出」て嫡男の特権を享受した「私」と、故郷残留者に甘んじ貧乏籤を引いた弟Aとの間に底流してゐた葛藤意識の自覚を契機に、Aを「厳然たる人間存在」と意識する心理の奥底にあつた問題が明確に開示されていく。

(三)

兄弟間に内向するわだかまりは、以下のような叙述に反映している。「私の家は、上へは管理人見たいになつてAの一人息子H夫婦が住んでゐる。」この表現は、法定上の家の所有権は「私」に帰属し、その結果、別に「山の家」を構えて分家したAの息子Hが、表向き家屋の管理を代行していることを物語っている。それが長期に及ぶことによつて、「私」は、実質的に家を支配する占有権が生じているように感じ取っている。このような意識の制約が「私」に働きかけるために、「私は侵入者見たい」に古ぼけた家の中に足を踏み入れることになるのである。外見は幼少の時のままの室内が「再現する」のだが、継嗣である「私」の意識が、家督を相続した嫡男が、ひさかたぶりの帰郷にくつろぐ鷹揚な心理ではなかつたので、出迎えたHのいつもの笑顔を絶やさないう「屈托のなさ、うな顔」に過剰反応し、危篤と聞いて駆けつけているに過ぎない人間達にも、「奥の座敷に入つて見ると、近年結婚して他郷へ行つてゐる苦の、Hの娘二人が朗らかな顔して座を構へてゐる。」という表現において、血縁の来訪を素直に迎え入れられない拘つた違和感を読み取ることができる。因みに、大本泉氏は、H等親子の笑顔を「久しぶりの血族の集いに軽い興奮を覚えている」と解釈しているが、「今年の秋」は、すべて「私」の心理で統一された一元的世界であるので、この場面も、「私」の生家を実質的に維持してきた係累一同に、気圧されるような負い目の感情の反映を探るべきである。Hを「管理人」みたいにして生家を委託している間に、Aに始まって曾孫の赤ん坊に至る直系の連綿とした生活の継続があつたことに、「人生推移の様が不思議のやう」に感じられるのである。いかに正当な相続権の所有者であらうと、生家への実質的関与

を欠いた「私」が、帰郷後「自分独りの居所がなくなつた思ひをした。」のも当然であつた。

昨夜来、「私」の念頭を占めていた「唯一の願望」は、Aの病床を見舞い、今生の別れを交わすことであつた。帰郷前、「私」が承知していたAの近況は、「白内障」のために視力を失つたも同然で、普通食を食べるのもままならない老衰した痛ましい闘病者のイメージであつたが、H夫婦から直接聞きえたAの病状は、絶望的な末期癌であり、しかも幽門閉塞症を併発し、糞便の始末まで医者の手を煩わさなければならぬような末期のものであつた。ところが、遅参した弟のIを促して「私」が病床を見舞つた時、病臥している「Aの寝姿は冷静で、死の迫つてゐるらしい趣は見えなかつた。」それだけにとどまらず、短い会話の要点と云えば、Aの覚悟の程を思わせる「誰にも知らせんつもりぢやつたのに。」という取り付く島のないような冷淡な返事が唯一の挨拶であつたのである。結局、「私」がAとの間柄について時間を追つて様々に回顧し、「厳然たる人間存在」と意気込んだ思い込みからすると、Aとの会話は、パセティックな場面どころか、「百里を隔てた郷里」と同様のよそよそしく遠ざかつた関係の確認に終わったのである。「私」は、はぐらかされたような予想外の事態に、不審と不本意感を禁じえないようであるが、そのように感じるのは、「私」自身の過剰な思い込みが原因しているのではないか。一生の別れに臨む「私」が、「感傷的気持」に心を揺さられるようなシーンを想像していたのは、〈死〉の問題にのみ、冷笑家らしからぬ一方的な思い入れをする固執に原因があつたと言ふべきであらう。にもかかわらず、「私」は、Aの掴み所のない「冷静」と「何の関心」も示そうとしないことを訝り、それは、「孤独の死」ではなく子や孫等に最期を看取られることに怨めを感じている「安らかさ」の

為なのかと、様々にAの内面に探索のメスを振るうのである。あぐくの果てには、そのような推測の連続にじれた「私」は、ややむきになって、「子孫のない者」でなければ、「あとは野となれ、山となれ。」のさばさばとした終焉は味わえまい、と思わず反発的な強弁に駆られる始末である。死に行く人間から拒まれた「私」の内面は、一人芝居的な独想の連鎖に繋がれたままである。

さて、このような曖昧模糊とした推測を断ち切ったのが、Aの受洗の事実である。^{注8}Hの妻の口から次のような予期せぬ出来事が伝えられる。

「それよりもかういふ事がありました。こなひだ、岡山のカトリックの学校から、お年寄の方が来て下すつて、洗礼を授けて下すつて、これで天国に行けますと仰いました。」

それを聞いて私は、童話見たいな面白さを感じた。押し付け洗礼にしても、死の悩みの和らげられさうに感ぜられた。どうせ直ぐ側のお寺で、先祖代々の習慣通り、仏式で葬儀が営まれるにちがひないが、Aが臨終の際にキリストの恵みにあづかることを思ふと、A自身よりも私に取つて、死生の悲哀感がいくらか和らげられるやうな気がするのであつた。

焦燥と不安に包まれる「私」の老残の根本要因は、叙勲者であるがゆえに死後の後始末に「取越し苦勞」をしたり、相続した家の「処分法」に心を砕く現実問題より、なによりも〈死〉を如何にして迎えるかという究極の問いに答えを持ち合わせていないためであつた。とすると、「童話見たいな面白さ」と感じた「私」は、他愛無い児童に似た出来事に興じたのではあるまい。魂の永生が約束されたことを真率に宣した老神父の言葉は、その瞬間、分別臭い俗情的思考法や、「私」の痼疾となつたシニシズムから飛躍した論理が、一瞬啓示されたように思われたの

である。岡山の学校に「国学を教へに行くこと数年に及んだ」Aの受洗が、本人の自由意志とは無関係なお節介な「押し付け」であつたにしても、〈死〉の恐怖が和らげられるであらうと安堵し、さらに踏みこんで、「私」自身にとつても、「死生の悲哀感がいくらか和らげられるやうな気がする」という表現は、キリストとの交わりによつて、罪が清められることに信頼を寄せているわけではないが、「私」を支配する痼疾となつたニヒリズムが強調されていることからするならば、すこぶる異例な感想に違いないのである。驚きの一瞬が過ぎたあと、Aが洗礼を授けられたことに論理の脈絡をつけることが出来ない不審感に立ち返つた「私」は、「小学校卒業後の数年間」の追懷を綿密に辿りなおすことになる。

この期間は、「私」が「東京留学」に向かう前史で、近所の漢学塾から岡山のキリスト教系の私塾へと学齡を重ね、Aと分かれて自己を形成する独自の道を歩みはじめた精神の揺籃期であつた。それが、Aにはなかつた「キリスト教にかぶれ」ということであり、それに反して、Aは、「針の先ほどの信仰」を持つことはなかつたのである。Aがその後「国学書の研究」に打ち込み、「山田孝雄」に師事したり、「神道に心を寄せてゐた」過去の経歴も、「私」の不審の大きな根拠と感じられるのである。以上のように、押付けられた入信ではないかと速断したことは誤りではない、と執拗にAの生涯を追懷しなおしている「私」の没頭ぶりは、Aの洗礼がいかに衝撃的であつたかを証明する。その結果、迫り来る〈死〉の切迫感に脅かされているにもかかわらず、依然として死生への覚悟が未確定な「私」の混迷は浮き彫りにされざるをえないのである。

なお、作品を一読すると明らかなことであるが、「私」以外の血族のネーミングは、登場順に書くことであるが、「私」以外の血族のネーミングは、登場順に書くことであるが、「私」以外の血族のネーミングは、登場順に書くことであるが、「私」以外の血族のネーミングは、登場順に書くことであるが、^{注9}唯一、Aが師事していた人物のみ、「山田孝

雄」という固有名詞で出てくる。周知のように、山田孝雄は、中学校中退の学歴にもかかわらず独力で研鑽を続け、主著『日本文法論』（明41）において国文学の体系化を樹立した碩学で、その研究業績は古典文学の研究、国史学・文献学等の広範な分野に及んでいる。「国学の本義」等の著作によって、国粹主義的思想を説いたことでも知られる。Aの「一生の仕事は、万葉達の源氏だの、国学書の研究であつた」が、地方にいて孜々として研究に打ち込んだ好学の士であつたことになる。在野の篤学の人物であつたAが、「師事」し傾倒した山田孝雄は、Aの生涯を浮き彫りにするために恰好な人物であつたことになる。さらに付け加えるならば、Aの志す方向が、国学や神道等の復古的思想であつたに違いないという強い推断、つまりAの受洗が、本人の意思とは無関係な押付けであらうという判断を根拠付ける具体的人物として、山田孝雄は固有名詞で書かれなければならなかつたのである。

Aに対する「送別の辞」を予想した時、かつて亡父へ悼亡の言葉をかけた老婆の素朴な信心に匹敵するものを欠いた「私」は、言葉に窮せざるをえまい。にもかかわらずと言うべきであらうが、「私」は、死者と生者との間に広がる「絶対無縁」の関係を盾にして「言うべき事」を持たないことについて、弁疏にむきになつてゐるのはやや醜態であらう。同様に、「古来の聖人賢者」が、臨終の人間心理についてまことしやかな臆断を重ねてゐる、と平素のシニシズムを振りかざして槍玉に挙げた件も、懷疑精神の合理化にしか響かない。要するに、この時点の「私」は、論理を俎上にのせて理非を弁別することから自由になれなかつたのである。しかし、臨終間際のAについて、「私」がいかにように論理上の理非に没頭しようとも、受洗した「厳然たる人間存在」を見る思いを回避するわけにはいかないわけである。自ずと「私」は、少年時代に「か

ぶれ」たキリスト教の問題を、どのように決着させるかという未了の課題に立ち返らざるをえないのである。

好天に恵まれた翌日、「私」は弟Iに誘われて入江の海へ鯊釣りに出かける。「老境を突破するまで生き延びた八人の兄弟」の中で、「私」・Aは勿論、「会社の勤めが忙しい」Iも、それぞれ各界で老齢を感じさせない活躍を続けてきた人間である。兄弟中の唯一の例外が、事志を得なかつた弟Rである。この場面で、生涯独身のまま実家に寄寓し、「不運」な老いの身を郷里に埋没させなければならなかつたRが登場する意味は大きい。究極の問題に心魂を傾けようとする「私」には、「勲章」等の「榮譽ある装飾」に傾わされる俗情から遠ざかろうとしていた。その時、老人Rと「私」の世俗的区別は意味を失い、両者の運命は「運次第で」逆転したかもしれないという判断に導かれる。生前「私がRに似てゐる」と言つた父の言葉が、「私」によつて「子を見る親に如かず」と肯定されることによつて、自他の間の一見大きな社会的隔たりは相対化されたのである。帰郷前に「私」が考へていた「一塊の生物」として死んでいくという観念的シニシズムは、人生の不遇を典型的に体現したRに対して、自他同視の認識を作り上げることによつて、「私」の中に根付かせられることになつたのである。このような一視同仁の認識は、「人造の飾り」によつて社会的榮譽に登りつめたような「私」が、そこから脱却し「一塊の生物」に相応しい自分の始末を考へていくことを強く促していくことになるのである。

故郷を出立する直前、〈今年の秋〉の帰郷に特別の感慨を覚えることになつた「私」は、「桜花爛漫」の時に逝つた父、「みづ／＼しい新緑」の頃に永眠した母について書いた「今年の春」「今年の夏」の連作に接続するレクイエム小説の構想を思い浮かべる。「私」が父母の〈死〉を

回想する時、陰惨なイメージは皆無である。逆に故郷の風光明媚な美しい自然が回想され、「私」は、父母が「風趣豊かなこの墓地に永遠に眠る」かのように思い、家郷に距離を置き続けた「私」自身までが、父母の傍らに葬られることを「空想」するほど、死後の両親は静かな安らかさに美しく昇華されていると言つて差し支えない。「私」の滞在中は、連日好天氣が続き、墓地から見渡される景色は「山も海も、おのづからの絵」と形容される風情に溢れるものであり、翌日「秋晴れの空」の下で、故郷の入り江に船を出し「沙魚釣り」に興じたことなど、死んでいくAの追憶は、〈今年の秋〉に相応しい清澄な風景と分かちがたく記憶されることになる。「私」は、Aの〈死〉を静謐な父母の永眠に通じるものであれかし、と祈念して〈今年の秋〉の構想に思いを馳せたのではない。そうすると、両親・Aと異なり、自分の始末の未確定に苦慮する「私」が、自分の〈死〉について、寒風の吹き荒ぶような荒涼とした〈今年の冬〉のような景観を連想したのも自然なことになってくるであろう。

(四)

ある日、弟Iが、Aの葬儀の模様を記した「知人からの知らせ」を「私」のところに見せにくる。この文書は、本文の表現からI宛ての私信であろう。平素、兄弟が「往來すること」は「甚だ稀であり」、「世間の用事の乏しい私」と違って、弟のIは「会社の勤めが忙しい」体であった。そのIが、わざわざ「私」を訪問して、葬儀に関する詳細な知らせを持参したのは訳がありそうである。Iの人となりは、すでに帰省途中の「赤穂見物」を物語ったり、名物の「汐見饅頭」を賞味する件な

どにおいて、簡潔な描写であるが、陰性の「私」とは異なるキャラクターIであることが示されていた。郷里での滞在二日目、兄弟で釣りを楽しんだ時、船の船頭が、かつて生家に奉公したことのある妻の人物評として、兄弟中で「Iが一番面白い方」であったという言葉は、弟Iが気象の面白いさばけた老人であることを証明している。そのようなIは、帰省中Aの心理を掴みかねて様々な角度から推断を重ねる「私」の感慨に、影を投げかけることは一切なかった。やや形式的な見舞い客であつたIにとつて、老齡のAの〈死〉は、すでに折込済みであつたであろう。多用なIが、「私」をわざわざ訪ねてきた理由は、看過し難い出来事に衝撃を禁じえなかつたためであると考えるべきであろう。じつは、「私」においても、Iが訪問してくるまで、Aに対する考え方に決定的な差があるとは必ずしも言えない。Aとの今生の別れを終えた気の緩みから、帰途気ままに京阪方面に立ち寄り、秋の行樂を楽しんだ行程からも十分推測が可能である。「私」は、弟Iと同様に、Aの死は既定のことであり、先祖から相続した「ボロ家の処分」に決着をつけなければならないと考えるような現実の世界に立ち返っていたのである。

ところが、I訪問後の叙述は、Aをめぐる「私」の帰郷物語と激しく断絶した内容を提出している。Aの葬礼が、当初の予測通り先祖代々の仏式で執り行われた「翌日」、「岡山のカトリックの女学校の講堂で、正式に追悼ミサ葬儀ミサが行はれた」ことを知る。「押し付け洗礼」と断じた理由の一端には、Aが女学校の功勞者である関係から推断されていたわけで、ここまでは、「私」の予測の範囲を超えていない。しかし、小説の結末において、事態は、「私」を茫然自失させるような予想だにしかつた衝撃的な終結を示す。

それよりも私が心を惹かれたのは、Aがああ病苦のうちに、洗礼の

和歌をつくつてゐる事である。

洗礼の水まろらかにかほにおつ

かしらにそゝぐたふときろかも

押し付け洗礼にしても、彼は何かしら有難い思ひをしたにちがひない。さうすると、私よりもAの方が仕合はせか。

当然のことであろうが、洗礼の真相は、Aが詠んだ和歌を忖度することによつてしかあきらかになるまい。「私」に対して終始胸襟を開くのを拒んだまま逝つてしまつたAの真意は、遺詠をどう理解するかに尽きている。臨終間近のAが、神の祝福を素直に受け入れた和歌を詠んでいた厳肅な事実の前には、帰郷中の「私」がのめりこんだ論理上の理非は、全く無効である。このように考えると、Aが洗礼の和歌を詠んでいた事実、及びその和歌の内容は、帰省中、家人から洗礼について知らされた時の「私」の感想と決定的に齟齬してくる。

帰省時と帰京後に出てくる「押し付け洗礼にしても」という同文の表現は、いずれも判断の揺れを伴っているようであるが、前者は、Aの生い立ち・研究・思想のいずれをとつても、Aの意思を無視したお節介な救済の押付けに違いないという立場を保持できていた。しかし、後者の場合は、洗礼の和歌によつて、キリストと交わり、罪が清められた入信の可能性に途惑う意識が背後にあるであろう。もつと踏み込んで言うならば、臨終前のAは、死生の問題について明確に自己決定して逝つてしまつたのではないか、という思いを揺曳させていよう。帰省時、Aの洗礼は、〈死〉の苦しみが和らげられれば、それでよしと考えていたように、受洗自体の意思が疑問視されていた。文脈によつて強調されていたのは、キリスト教に早くから感化されていた「私」が、信仰時代の情熱のかすかな余燼を思わせるような、「キリストの恵み」を思い、別離の

悲哀がいささかでも軽減されるという感想にあつた。ところが、後者において、「彼は何かしら有難い思ひをしたにちがひない。」という確実な推量表現になつている。その結果、「さうすると、私よりもAの方が仕合はせか。」という表現は、神道に傾倒していた筈のAが、キリスト教にかぶれた「私」を出し抜いて永遠の命を約束されたかもしれないという立場の決定的な逆転を意味したのである。そして、投げ出すようにボツンと呟かれた小説の結びは、突き放された「私」の茫然自失のような心理状態を意味していると考えるべきであろう。「私」のシニズムに終止符を打つたポジティブな認識の転換を読むのは、適切な考えではあるまい。清澄な〈今年の秋〉に昇天したAの最期に反して、「私」は、キリストの恵みに心魂に徹して帰依できるかどうかについて、依然として自己決定が未了であり、〈今年の冬〉のような混迷を痛恨していることは疑えないのではないか。

(五)

主題論的に「今年の秋」の構造を見通すことのできる積極的な観点を探ろうとすると、前述したような四部構成説に囚われることなく、大胆な作品の腑分けが必要になつてくるように思う。作品は、大別して二部に分割することができる。次第Aの危篤の報を受け、今生の別れを告げるために急ぎ帰省し、家人から弟Aが受洗したという予期せぬ出来事に接する。帰京後、Aが死去したという知らせを受けて、生家をめぐる隠微なわだかまりを引きずつた弟との関係が一段落したと感じる箇所までを第一部と考える。小説の結末部は、小説の大半を占める帰郷物語を相対化する独立した機能を持った第二部と位置付けられる。つまり、小説

の大半を占める第一部が、人生に対する根深いシニシズムの支配を突破できなかった凡愚の感想録を記した〈長歌〉の部分に相当するとすると、小説結末部において洗礼の和歌をめぐる「私」の自問には、死生への煮えきらぬ発問を、新たな認識のレベルへ解答を迫る〈反歌〉、いわゆるかえし歌に当たると見ることができるのである。

短編「今年の秋」は、白鳥晩期の創作に著しい自在な感想録小説として書き流された印象を抱かせるが、小説の構成を検討してゆくと、〈死〉をめぐる様々な推断に明け暮れた帰郷物語に對して、帰省時の不徹底で独断的な感想録を根底から破壊する結末部のアイロニカルな方法が、最大限の効果をあげていると考えられるのである。

注

- 1 兵藤正之助『正宗白鳥論』（昭43・1 勁草書房）山本健吉『正宗白鳥』（一九七五・四 文芸春秋）武田友寿『「冬」の黙示録 正宗白鳥の肖像』（昭59・9 Y M C A出版）高橋英夫『異郷に死す 正宗白鳥論』（昭61・10 福武書店）松本鶴雄『ふるさと 幻想の彼方——白鳥の世界——』（平8・3 勉誠社）
- 2 後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』（昭41・7 思潮社）
- 3 注2の「年譜」による。
- 4 吉田義範『「今年の秋」における真実——正宗白鳥に関する覚え書き その四——』（「富山工業高等専門学校紀要」18巻1号、昭59・3）
- 5 「今年の秋」において言及された某美術家の芸術院会員辞任事件に関して、昭和三十三年十一月二十二日の「朝日新聞」は、芸術院会員小杉放庵が、同年六月高橋芸術院長に辞表を提出したことに端を発した顛末を報じている。結局、院長の五か月に亙る説得工作にもかかわらず、翻意とならず、辞表は受理された。同記事には、美術家の辞任は横山大観・梅原龍三郎について三人目であると記す。白鳥は、雑誌「新古文林」等で国木田独歩と関係の深かった小杉と相識の関係にあった。晩年の独歩の病床を慰めるために編まれた「二十八人集」（明41・4 新潮社）に、白鳥は「六号記事」という小説を寄せているが、この合著は、その扉に「別に満谷国四郎、小杉未醒の両画伯が彩豪を添ふるなり、寧ろ三十人集と云ふを当れりとす」とある。その他、『白鳥集』（明42・5 左久良書房）の装画は小杉の手を煩わせている。両者は、決して無関係の間柄ではない。小杉の辞任劇は、白鳥が、世俗的榮譽を脱却し、本来の根源的問いへ求心的に舞い戻る間接的な契機として働いたであろう。
- 6 注1の山本健吉『正宗白鳥』。
- 7 大本泉『「今年の秋」——正宗白鳥——』（「解釈と鑑賞」一九八九・四）
- 8 正宗甫一「正宗敦夫伝」（「古典研究」第9号、昭57・3）は、洗礼に関する経緯について以下のように伝える。「大学の名譽学長シスターメリーコスカの愛顧を受け、敦夫七十七才の十月二十七日、病不治と分明するや、ノートルダム清心大学より急遽自動車にて、シスターマリーイグネシアスと秘書を伴い、敦夫病床の処に立ちて洗礼を授く。」「正宗敦夫伝」によると、ノートルダム清心女子大学で大学葬が営まれたのは、十一月十五日である。小説「今年の秋」で、後日、葬礼に参列した知人から報告を受けた「私」にその模様を伝えるに來たのはかなり後になつてのこと

とであろう。ちなみに、正宗白鳥は「弟の思い出」(「山陽新聞」昭33・11・15)において、在野にあつて古典文学研究における縁の下での力持ちな学究に孜孜として倦むことがなかった生き方に、しつとりとした敬愛の念が伝わってくる追悼の談話を発表している。洗礼の和歌について言及はない。談話取材の時点で、和歌の存在を知らなかったのではないか。後日、洗礼の和歌を知ったときの衝撃は大きかったと思われる。なお、この談話は、福武書店版『正宗白鳥全集』には未収録である。吉崎志保子『正宗敦夫の世界』(私家版 平元・11)の指摘によって知りえたことを付記する。

9 モデルである敦夫・清子(名前はすがこ。大岩鉦『正宗白鳥』〈昭39・12 河出書房新社〉の指摘による)・五男・甫一・律四に一致する。

10 奇縁と言うべきであろうか、山田孝雄は、敦夫が亡くなった八日後の十一月二十日に死去している。作品では、故山田と表記されていない。故人扱いではない。敦夫の勤務校において大学葬が営まれたのは、十一月十五日である。そうすると、小説の末尾において、葬儀関係の一切が明らかになっているので、「今年の秋」が書かれたのは、大学葬から間もなく、二十日以前ということになるのではなからうか。すでに、注1の武田友寿『「冬」の黙示録』が、「中央公論」一月号は、前年の十二月初旬の発売、原稿の締め切りは、十一月二十四、五日になるのが慣例だから、執筆はその数日前であろう、と推定していることは正しいことになろう。「中央公論」一月号の発売日は確認していないが、昭和三十三年十二月十日の「朝日新聞」の広告欄に「新年特大号発売中」

の広告が掲載されている。